天下祭の音楽

江戸の天下祭は幕府が特別に認め、神幸行列が江戸城に入り将軍が上覧した祭の総称である。具体的には、山王祭（山王権現、現在の日枝神社）、神田祭（神田明神、現在の神田神社）、そして正徳 3（1714）年のみ天下祭として開催された根津祭（根津権現、現在の根津神社）の三つの「御用祭」であった。神社からの神輿はもちろん、江戸の広い市域の町々から山車、笠鉾、屋台、地走（踊）、囃子などが提供され、行列に加わり、様々な芸能が繰り広げられた。そこには音楽も重要な役割を果たした。

明暦 2（1656）年に描かれたと思われる山王祭の屏風を見ると、江戸初期の天下祭の音楽を奏でる楽器の種類が、後の時代のものと比べて限られていたと推察できる。出場した奏者全員が描かれていないにしても、山車と神輿には大太鼓（おおだいこ）と大拍子（だいびょうし）が伴い、神楽屋台には笛、締太鼓（しめだいこ）、小鼓（こつづみ）を含む囃子しか認められない。20 年ほどが経つと、増加傾向が少し見られる。延宝 5（1677）年序の『江戸雀』には山王祭の屋台（付け祭か）には「小歌、三味線、笛、つつみ、太鼓、かねをうちならし」が加わり、またその 40 年後の宝永 4（1707）年の山王祭の絵巻と筆記にさらに多くの音楽のジャンルと演奏者が記録されている。田楽には「びんざさら」と「腰鼓」が確認でき、屋台には木遣りが含まれ、日本橋本町、小田原町、新石町などの町からは計 24 人以上の「はやし役者」が行列に参加していたようである。田楽と神楽は主に祭が由緒ある伝統的な行事であることを保証していたであろう。大田南畝が文化 3（1806）年に「おのれらも田楽てふものはけふなん初めて見侍り、いとこだいなるものにぞ」と書いている。

天下祭の祭囃子の濫觴（らんしょう）は葛西囃子であり、それが「馬鹿囃子」あるいは「和歌（若）囃子」とも呼ばれ、いよいよ「神田囃子」にまで発展することが明治 31（1898）年『朝野新聞』の記者を務めていた杏村生が『風俗画報』に発表した説であり、現在の定説といえよう。ところが、この論文には数多くの不自然な点と明らかな間違いが含まれている。それでも 19 世紀末の葛西の囃子方の口伝として興味深い主張も認められる。江戸より東の本所あるいは葛飾区に祭囃子が盛んに育成されていたことはほぼ間違いないであろう。斎藤月岑著の『武江年表』によれば、「九月頃、夜に入りていづくともなく拍子を取り、太鼓を打つ音聞ゆるといふ」、喜多村信節がそれに「夜の太鼓の音するは、いはゆる本所のばけ太鼓なり。夜人静まりでは遠音問ゆるものなり。然れど風につれて、髣髴として定かならねば、人これを怪しむ。本所小梅［町］・寺島［町］などにて、若者どもばか拍子を習ふ。多く夜分集りでは

やしする事なり。祭礼には神田山王に出しの拍子は多くこれを履ふ。又葛西よりも出づれば槃(がい)してかさいと云ふ」に注記を付け加えている。神田囃子に含まれている曲の文献の初出は寛政 5（1793）年の龍ヶ崎本（東京国立博物館蔵の模本にフリガナが付く）の『神田明神祭礼絵巻』にある。そこには、「同（旅籠町）弐町目、万度は風流の踊屋台に依て、其趣向美をなし、楽車(ダシ)ハ午枳鳶(テコマヘ)（東博本に「手拐鳶」の声につれて、きりん・神田丸をはやす）」とあり、「神田丸」という曲の存在も神田囃子のレパートリに含まれている。この絵巻にある「手拐鳶」または「手拐鳶」の読み方について「午」は「牛」と読むべき説もあるが、東博本の如く「手」が正しいであろう。「枳」（または「拐」）はおそらく「棍」の翻刻の間違いと想定すれば、「手棍」とは（てこ） = てこの者、てこ前 = 鳶職を意味していることとなる。つまり、鳶職の「木遣り」が行列に加わったと考えられる。貞享 4（1687）年序の『江戸鹿子』には、すでに木遣りが山王祭に出現していることを証明している。

天下祭のもう一つの重要な音楽ジャンルはいわゆる「唐人囃子」であった。行列の一番の大伝馬町の太鼓打が朝鮮風の帽子をかぶることはさておき、神田祭の三番の麹町は度々象の付祭を登場させ、それに数多くの楽器を含む唐人囃子が付随している。楽器は例外なく中国のものではなく、朝鮮のテピョンソ（太平蕭）、 ナバル（喇叭）、ソグム（小笒、横笛）、ソゴ（小鼓）、ジン（ドラの一種）、ヨンゴ（龍鼓、朝鮮風の太鼓)であった。特にテピョンソとナバルは早くも享保 4（1719）年の朝鮮通信使に同伴していた曲馬団に活躍し、その後には多くの神田祭の神幸祭に出現している。

寛政頃以降の付祭には浄瑠璃と長唄も天下祭に大きな役割を果たした。その大半は町々から委嘱された新曲であり、作詞家には斎藤月岑の町名主の名前も認められる。動員された演奏者の多くは、吉原細見にもその名前が確認できる男芸者、あるいは歌舞伎劇場音楽家の浄瑠璃太夫、長唄の三味線方などである。また「素人」とされた女性たちの囃子方も活躍し、江戸の一流の演奏者ばかりであった。

このように、天下祭の音楽は少しずつ、量質ともに優れており、単なる「ドンドンチャカチャカ」ではなく、江戸の音楽界のほぼ全貌を凝縮し、観客に提供していた。